



IP 電話市場で、Yahoo! BB「BB フォン」の大量リードを猛追すべくキャリア・ISP が激しく動き始めた。今の流れは、キャリアを軸にした連合体を形成しているように見えるが、各社を結ぶ線は複雑に絡み合っている。理由は、「誰もがつながる次世代の電話」を目指すため。大目標に向けたIP 電話業界の協業・競争の図式と、参入各社の思惑を探った。
(本誌・小林正宗)

IP 電話の

Part 1 IP 電話の競争構造

Yahoo! BB の垂直統合型に連携体制で挑む競合各社

2001年12月から試験サービスを提供し、翌年4月25日に商用サービスが始まったYahoo! BBの「BB フォン」。当初、競合各社は現在のような脅威を感じてはいなかっただろう。

しかし、昨年7月から公表しているYahoo! BBの進捗状況を追ってみると、その急伸び率は目を見張るものがある。ADSLサービス加入者数が77万9000から12月末時点で169万1000と、わずか半年間で倍以上の伸びを見せた。さらにBB フォンは、31万9000から129万4000と約4倍に膨らみ、ADSLサービスの7割以上が利用するまでになっている。

まずは、IP電話市場に火を付けたBBフォンのポイントと、競合各社の動きを押さえておこう。

使い勝手を変えずにIP 電話へ

Yahoo! BBの特徴は、まずADSLアクセスからバックボーン、ISP事業まですべてソフトバンクグループで運営している点にある。したがって、BBフォンもIP網から一般公衆網を接続するゲートウエー装置までを同グループが一括して運用管理している。

そのサービスはYahoo! BBの基

本機能と位置付けられ月額基本料は無料。また、加入者間通話無料、一般電話との通話は国内だけでなく米国向けなども一律3分7.5円。こうした破格の料金設定は、垂直統合型のサービス体系によるトータルコスト削減効果の表れといえる。実際、BBフォンでは、1ユーザー当たりの平均通話料は、1100円だという。

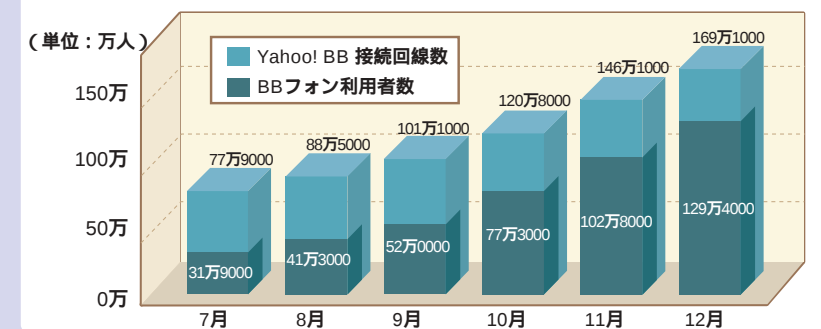
ユーザー側の利用環境として、既存の電話端末と「0AB～J」の加入者番号をそのままIP電話で使用していることも大きなポイント。ナンバー・ディスプレイも必須と考え、NTT網とNNI(Network-Network Interface)で接続。0AB～J番号の使用許可に関して交渉し契約を交わしている。これにより、ユーザーに違和感を与

えることなく、ブロードバンド環境に電話を取り込むことができた。

ソフトバンクBB・サービスオペレーション本部商品企画統括ボイスサービス企画部の野田真部長は、「ユーザーのシチュエーションを考えると、従来からの電話番号が使えるほうが便利であるし、ADSLを利用しているのだから着信には一般電話を使えばいいと考えただけ。技術的には何ら難しいものはない。ユーザーの利便性向上のために妥協はしたくないと努力した結果」と話す。

さらに、携帯電話・PHSへの発信も可能にしたうえ安価な通話料を実現している。これについては、「携帯・PHSへの通話に関しては、さまざまなリスク要因が考えられ、社内でも論議はあったが、携帯電話のトラフィックがこれだけ増えている中で、通話ができないということにはしたくなかった」という。従来の電話業界では考えにくかったサービス内容の背景には、ユーザーメリットの飽くなき追求があったわけだ。

図1 Yahoo! BB・BBフォンの利用者推移



業界勢力図

Illustration/Y.Ikawa